



『THE ABSENCE OF TWO』や『Brick Yard』など、どの作品も紙質からこだわって制作。写真集そのものを自らの作品と捉え、ディテールワークまで抜かりがない

THE VISUAL PERFORMER

Akihito Yoshida / *Photographer*

吉田亮人 / 写真家

各界のクリエイターを紹介するTHE VISUAL PERFORMER。
今回ご紹介するのは、写真家の吉田亮人さん。
単なるドキュメンタリーではなく、
彼が生み出すのは、自身の内面をも投影した魂の作品なのだ。

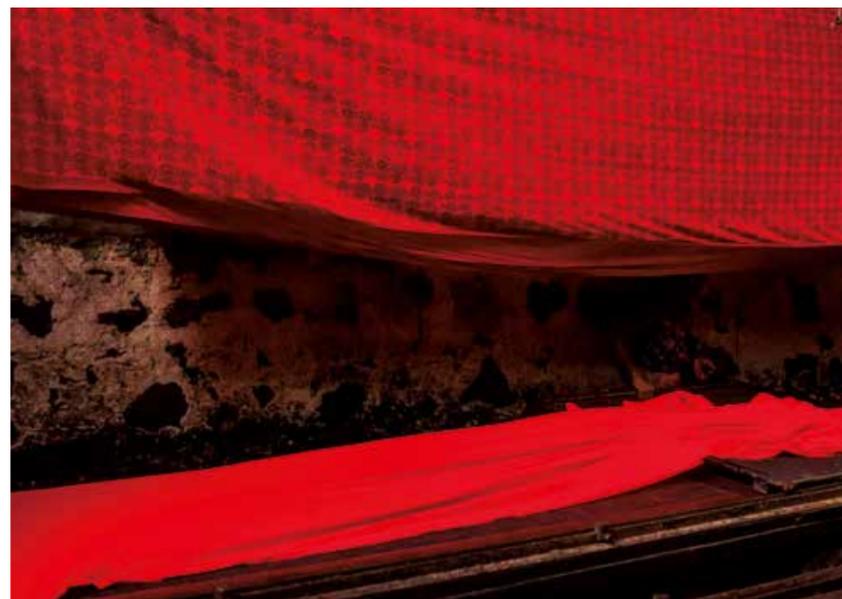
Photo/Yoshinori Kubo Text/TRYOUT

_152



チェキ日記

今後発表予定の『チェキ日記』の初公開カット。娘さんやご家族をチェキで撮影したこちらは、思わず笑みがこぼれそうな雰囲気がかがえる。早くも写真集の完成が待ち遠しい



Calico Factory Artisans

深紅の織物が目を引く一枚。インドでの偶然の出会いから生まれた吉田さんのデビュー作『Calico Factory Artisans』は写真家として“何を撮りたいのか”を最初に教えてくれた作品だという

THE
VISUAL
PERFORMER
Akihito Yoshida
Photographer



Brick Yard

バングラデシュのレンガ工場働く人々に密着した一枚。頭上にレンガを載せて運ぶ人々や、無数のレンガが整然と並ぶ様子など日本ではお目にかかれない光景を切り取り、労働の原風景に迫った



「作品としてのアウトプットは絶対に本。やっぱり僕の場合は、本がすべて」



Tannery

バングラデシュの革を鞣す工場の様子を撮影した作品。働いている時間の厳しい空気感とは裏腹に、休憩時間の柔らかなテンションの違いが見どころ。紙を革に見立てた装丁デザインもハイクオリティ



THE ABSENCE OF TWO

他界した祖母と従兄弟の暮らしぶりや何気ない瞬間を捉え、儚くもどこか温かみのある作品に仕上げた。ご自身の身内を題材にするという苦悩を乗り越えて完成したこの作品からは、写真家としての矜持が感じられる

写真家として人間のさまざまな側面を切り取ってきた吉田亮人さん。その作品は、被写体に潜むストーリーを感じさせ、魂に訴えかけるような魅力にあふれている。「写真家としては遅咲き」と言う彼に、どのように写真と対峙してきたのかを伺った。

——写真を始めたいきっかけはあったのでしょうか？

大学時代に初めてカメラに興味を持ちました。もちろん最初は本当に趣味のレベルに過ぎなくて。仲の良い友達4人でいつも行動していたんですが、僕以外の3人は映画とか音楽とか本とか、いわゆるカルチャーに深い知識を持っていたんです。僕には敵うものがなかった。それで、今から始めたとして彼らに追い付くようなものは何かあるのかと、そんな理由で写真を撮るようになった。もう一つの理由は音楽。大学時代にバンドを組んでいて、音楽にもハマっていました。当然、音楽雑誌に目を通していたんですが、写真家の佐内正史さんが撮影したミュージシャンの中村一義さんの写真が抜群にカッコよくて。他にもエレカシの宮本さんとか、僕の好きなミュージシャンばかりを撮影されていたんです。

それで佐内さんの作風を模倣した写真を撮っていました。

——大学卒業後、すぐに写真家を目指されたんですか？

いえ、教育学部を卒業してから日本語教師としてタイに渡航し、1年間過ごしました。実は卒業後も教師になろうという考えはなかったのですが、現地で暮らしてみると、海外生活が楽しくて。それに人に教えるということが、肌に合っている気が付いたんです。それで日本に帰国してからも教師を続けていました。

——このまま教壇に立つのかという感覚だった？

そうですね。でも、実はそこからが急展開で(笑)。日本で教師を始めてすぐ結婚し、子供も生まれ穏やかな毎日を過ごしていました。でもある日、妻に話があるとされたんです。「何か悪いことしたかな」って内心ドキドキしていたんですけど、開口一番言われたのが「まだ教師続けるつもりなん？」と。当然そのつもりだと答えたら、「つまらないな」と言われたんです。「ふたりとも同じ職業で、同じように年を重ねていく未来を予想できすぎて面白くない。それより自らの力で未来を切り開いていく姿を子どもに見せたい方がいと思う」と、突然言われたんです。本当にびっくりしました。かなり悩みましたが翌日の夜には「教師辞めるわ」と妻に伝え、彼女の勧め



THE VISUAL PERFORMER
Akihito Yoshida
Photographer

「自分自身のルーツや原風景が、ふと立ち上がってくる瞬間がある」

めもあって写真を撮ることに決めました。

——手探りながらも、ついには写真家としてのスタートを切ったわけですね。

はい。1年間の準備期間を設けて、正式に活動を始めたのは2010年です。ただ、

最初はまだの無職ですよ。当時30代を迎えたところで、時間もお金もそんなに残されてない。だから専門学校に行っている暇もないし、誰かのアシスタントにつくというのもコネクションがありませんでした。考えた結果、まず作

品を作らないとダメだろうと。それで最初はタイに行きました。土地勘もあるし、もう一度行ってみようと思ったんです。いろいろ調べてみるとミャンマーから逃れてきた人たち

が難民キャンプを作り、10万人ぐらいたった山奥で生活していることがわかりました。そこで彼ら取材にいくと思ったんです。自分でもアクションが上がり、気分はもうフォトジャーナリストでした(笑)。

現地では難民キャンプにどうにか入ることができ、いろいろな場面を撮影させてもらいました。そんなとき、難民キャンプの人に言われたんです。「何とかしてこの現状を伝えてくれ」と。でも日本に帰ってきてから、どうやって写真集を作り、どんな形で発表するか。そんなことも考えていなかったことに気づきました。自分の甘さもあり、その写真をお蔵入りしてしまっただけで、撮影をさせていただいた皆さんに引き合い、自分の写真で還元する。そういう覚悟すらなかったんです。

それから本当に自分が撮りたいものは何なのかを必死に考え、悶々とした日々を過ごしていました。それでも何も浮かばなかったのですが、写真家がよく訪れている印象もあって衝動的にインドに行ってみようと思ったんです。

——このインドでの撮影が吉田さんにとってターニングポイントとなったのでしょうか。

そうですね。インドではそれこそ何百枚何千枚と撮影しましたが「Calico Factory Artists」(P.08右)を撮影した工場では、自分でも驚くほどの熱量を持って撮ったことをはつきりと覚えてます。デリーからムンバイまで、約2500kmを自転車で旅しながら各地で撮影したのですが、ある町で「Calico Factory Artists」に写っている赤い布があちこちにたなびいていたんです。なんて美しいんだと見惚れていると、現地の少年に話しかけられ、いつの間にか工場へ連れて行ってもらえました。そこで感情が赴くまま3、4時間は夢中で撮り続けました。後日その写真をコンベに出したところ、初めてギャラリーで展示してもらえることになったんです。

次に向かったのはバン格拉デシュ。2012年のことで、当時、弟がリストラサレてしまい、働くことの意味を写真を通じて彼に伝えたいと思ったんです。その答えは肉体労働にあるんじゃないかと考えた結果、現地のレンガ工場働く人々を撮影しました。それが最初の写真集である『Brick Yard』です。この写真集、実は友人で装丁家の矢萩多聞さんと協力して、20

0部限定で自費出版したんです。完成まで苦労しましたが、パリのアートフェアで開催される写真集の処女作のコンテ

ストにノミネートされ、なん

『THE ABSENCE OF TWO』では、より身近な存在をテーマにされています。実を言うと、写真集を作る

前の2011年くらいから、祖母と従兄弟の日常風景を収めていました。その後、従兄弟の予期せぬ死や老衰による祖母の死が続き、結果的に吊いという意味も込めて写真集を作りました。自分の身近な人間にそういうことが起こって、自分の中でどう処理しているか全くわからなくて、当時は本当に苦しかった。でも、やっぱり写真家だったら何か一つの形にしないとイケない。そんな思いで何とか作り出した。完成後、ふたりが眠っているお墓に行つて写真集を燃やしたんです。いろいろな感情が渦巻き、ひと言では表せませんが、やっと自分自身前に進める気がしました。

もうひとつは写真集。自分の作品の最終的なアウトプットは絶対に本なんです。展示などいろいろな形がありますが、やっぱり僕の場合は本がすべて。最新作の『THE ABSENCE OF TWO』はデザインも製本も、すべてを自分で手がけました。完成に至るまでは見本を20パターンくらい作りましたが、手に取ったときの重量感やページをめくった感触など、納得した形に

AKIHITO'S FAVORITE ITEMS

「ロケ撮影に欠かせないお気に入り」



チェキ

「この10年以上、基本的に毎日1枚と決めてチェキで撮影しています。手軽さと独特の仕上がりはチェキにしかない魅力です」



フライターグのバッグ

「海外の厳しい環境に行くと、タフなバッグが欠かせません。防水性もあって汚れも気にならないし、質感も気に入ってます」



ワークウェアスーツのジャケット

「撮影時は動きやすい服装が基本ですが、かつりした服装が必要な場合も。このアイテムは伸縮性もあって重宝します」